ネルチンスク条約直後 清朝のアムール川左岸調査

松浦茂

【要約】 清朝は康熙二十九年（一六九〇）に、アムール川の左岸地域に大規模な調査隊を派遣した。その目的は、前年のネルチンスク条約で画定したロシアとの国境を調査して、国境の周辺に碑を建設することであった。調査隊は全部で九つの隊から構成され、それぞれ五十人程度の規模であった。隊員はほとんどが満洲八旗の兵とソロン・ダグルであり、その他にロシア人も数人加わっている。清朝は、アムール川左岸の各支流の水源となっている分水嶺をつないだ線を国境（大興安）と考えていたので、調査隊は各支流を溯って、その分水嶺を目指した。そしてアルグン川とゴルビツァ川の河口やウイェケン山（トゥグル川の水源）などに碑を建設したのである。調査隊が達成した成果は、政治上・学問上きわめて重要である。形として残っているのは、ランタンの地図しかないが、かれらの国境認識は、永く清の公式見解となった。

史林 八〇巻五号 一九九七年九月

はじめに

清朝がアムール川の沿岸地域に勢力を伸ばすのは、十七世紀中葉のことである。ちょうどその時期にはロシア人もアムール地方に進出しており、両者はその領有権をめぐり激しく衝突した。アムール川の流域に平和が回復するのは、両国がネルチンスク条約を締結した康熙二十八年（一六八九）のことである。

清はネルチンスク条約を結んだ翌年に、アムール川の左岸地域に大規模な調査隊を派遣する。調査隊の目的は、ロシアとの間の国境を調査して、国境の近くに碑を建設することであったが、これにより清はネルチンスク条約を具体化するとともに、アムール川の左岸地域に関する地理知識を飛躍的に拡大することができた。アムール地方の歴史においてこの調査のもつ意義は、きわめて大きいものがある。

それにもかかわらず康熙二十九年の国境調査について、本格的な研究が行なわれたことは、これまでほとんどなかった。その理由は明白であり、調査隊に関する史料が、既存の文献に残っていないからである。そうした中にあって吉田金一氏は、調査隊の成果であるランタン作成の地図を発見して、研究を前進させられたが[1]、しかし調査の全体像を解明するためには、ランタンの地図だけでは限界があり、新しい文献史料の発見がぜひとも必要であった。

さて清代のアムール地方に関する研究は、一九八〇年代に入ってめざましく進捗した。これは、中国に現存する歴史檔案の研究が始まって、その使用が一般化したことの結果である。わたしは一九九五年に中国において、満洲語檔案を調査する機会をえたが、そのとき『黒龍江将軍衙門檔案』の中に[2]、ネルチンスク条約直後の国境調査に関する史料が、多数保存されているのを発見した。さらに調査を進めていくと、以前に別の論文で取り上げたことがある、バハイらによるアムール川下流地方の地理調査も、この調査の一環であることに気がついた[3]。それ以来わたしは史料の収集と整理につとめてきたが、ここにきてようやくこの問題に見通しを得ることができた。

そこで本稿においては、まず康熙二十九年に実施された調査の概要を述べ、続いて国境に関する清朝の解釈について明らかにする。

① 吉田金一「郎談の『吉林九河図』とネルチンスク条約」（『東洋学報』第六二巻第一・二号、一九八〇年）、『ロシアの東方進出とネルチンスク条約』（東洋文庫、一九八四年）、『ロシアと中国の東部国境をめぐる諸問題』（環翠堂、一九九二年）を参照。

② 『黒龍江将軍衙門檔案』は、現在黒龍江省檔案館に所蔵されている。わたしは中国第一歴史檔案館で、そのマイクロフィルムを調査した。

③ 拙稿「十八世紀アムール川下流地方のホジホン」（『東洋史研究』第五五巻第二号、一九九六年）一三二頁を参照。

第一章　アムール川左岸調査隊の結成

康熙二十八年（一六八九）七月八日から、シルカ川流域のネルチンスクの地において、中国とロシアとの間に講和会議が開催された。会議の結果、両国はゴルビツァ川から海まで達するアムール地方の国境を画定し、戦争状態を終結して国交を結ぶことに成功する。これが有名なネルチンスク条約であって、これによりロシアはアムール川流域への南下を阻まれて、カムチャツカ半島方面への展開を加速することになった世界史的な事件であった。

清初の中国人が、アムール川左岸地域に関してどの程度の知識をもっていたのかという問題は、従来の研究では必ずしも明確になっていないが、わたしは、講和会議以前の清はそれについて正確な知識をもっておらず、ロシアの場合よりも一層不確かであったと考えている。というのは清朝がアムール地方に進出する際に採用した戦略の特徴は、アムール川の本流沿いに少数民族を制圧することであった。このためアムール川の流域については、上流地域まで十分な知識をもっており、講和会議のときにチョルナヤ川やゴルビツァ川など、左岸の小さな支流を国境に提案したのは、清側であった。[①] ところがいったん左岸の内陸地域に入ると、そこは放置したも同然の状況であった。満洲人や漢人がこの地域に足を踏み入れたことは、記録にはほとんど現われない。わずかに康熙二十二年（一六八三）と翌年の二回、清の八旗兵がロシア人を討伐するために進軍したにすぎない。このとき清軍の一部はゼヤ川を溯り、別の一隊は、アムグン川を溯ってトゥグル川の流域まで進んだが、[②] かれらはただちに引き揚げたので、これらの地域を調査することはなかった。このことは、講和会議の交渉にも影を落としており、左岸地域の国境に関して、清の代表は正確な知識にもとづく具体的な提案を行なうことはできなかった。清が使用した地図には、アムールの上流はアルバジンまでしか描かれていなかったといわれ、[③] 左岸地域は空白になっていた可能性がつよい。国境を確認するための調査は、清朝にとってすべてに優先する緊急の課題であった。

さて清朝がアムール川左岸の調査に乗り出すのは、康熙二十八年の年末になってである。『黒龍江将軍衙門檔案』康熙二十九年正月四日の条によると、黒龍江将軍サブスは、次の如く上奏している。

わたくしどもの兵を調べましたところ、エルグネ（アルグン）川のメリルケンの地と（そこへの）陸路を知るものがおりますので、かれらを一ルートから送って調査に行かせることができます。エルグネ川の河口から上流メリルケンまでと、サハリヤン＝ウラ（一般にはアムール川、ここはその上流シルカ川）対岸のゲルビチ（ゴルビツァ）川の上流にある、草も生えない興安の尾根づたいに海にかかるまでの地を知るものを、兵士の中に求めますと、それを知るものはおりません。そこでエルグネ川の河口から上流メリルケンまでと、北興安から発してサハリヤン＝ウラに合流するジンキリ（ゼヤ）・シリムディ（セレムジャ）・ニオマン（ブレヤ）などの河川の源流では、索倫総管マブダイなどが管轄するオロンチョンとソロンたちが、牧畜したり猟を行なっておりますので、マブダイたちに（かれらの中から）地理に明るいものを捜して、幾つのルートから調査に行かせるべきかを、上奏させていただきたいと思います。サハリヤン・スンガリ＝ウラ（松花江）に流れこむキムニン（ビラ）・クル・ゲリン（ゴリュン）・ヘングン（アムグン）などの河川の源流には、いずれも寧古塔将軍トゥンボーが所管しますキレルたちが住んでいますので、トゥンボーたちに地理を知るものを捜して、幾つのルートから調査に行かせるべきかを、上奏させていただきたいと思います。（括弧内は、現在の名称。以下同様）

このときサブスが、アムール川の上流地域と左岸内陸部の地理に詳しいものを兵の中に求めた理由は、計画が進行していた国境調査のためであったことはいうまでもない。サブスの上奏がいつ行なわれたのか、正確な日付は明らかではないが、議政王たちがこれをとりついで、康熙帝に上奏したのが、二十八年十二月八日であるので、計画自体はそれよりも前から始まっていたということになる。

なおこの計画の中には、地理の調査と並行して、国境に碑を建設することも含まれていた。そもそも国境に石碑を建設することは、講和会議に臨む前からすでに清の既定方針であった。清の代表は会議の初日に、早くもこの問題を提起して

おり、[4] 交渉が妥結した後にも、満洲語・ロシア語・ラテン語三種類の文字を刻んだ石碑を、両国の国境に建てることを、条約文の末尾にわざわざ書き入れたほどであった。[5]『清実録』康熙二十八年十二月丙子（十四日）の条によると、清はこのときゴルビツァ川などの国境に、満洲語・中国語・ロシア語・ラテン語・モンゴル語五種類の文字の碑を建設することを正式に決定したのである。

ところで前述したサブスの上奏に対して、議政王たちは次のように答えている。

考えますに、国境としたところを調べることは、重要であります。（中略）いまただちにここから二人の官を出して、将軍サブスと総管マブダイのもとに一人、将軍トゥンボーのところに一人を派遣して、協力して地形を知るものをよく捜して、幾つのルートから調査するのか、あるいは隊伍を組んで調査に行くべきかどうかを、よくはかって上奏させた後、所管の官庁から派遣すべきものを上奏させて、上意を待ちたいと思います。

議政王たちの上奏があった五日後の十二月十三日に、康熙帝はこれを裁可し、そしてその決定に従って、索倫総管マブダイと黒龍江将軍サブスのところには員外郎ダライを、寧古塔将軍トゥンボーのもとには主事サルトゥをそれぞれ送って、協議に入らせたのであった。[6]

北京から行ったダライとサルトゥをまじえて、サブスとトゥンボーらが協議した結果は、翌二十九年（一六九〇）二月初めにはすでに議政王たちのもとに到着している。『黒龍江将軍衙門檔案』康熙二十九年三月五日の条によると、ダライとサブスとは、次の六ルートの調査を提案した。

(1) メルゲン城からエルゲネ川のメリルケンまでは、秋八月に陸路を一ルートとして調査に行かせることができる。
(2) エルゲネ川の河口からメリルケンまでは、一ルートとして水路から調べに行かせることができる。
(3) メルゲンからジンキリ川の河源までは、秋八月ごろは馬で行けば一か月余りで至る。そこから先興安の尾根までは、一日で達する。これを騎馬の一ルートとして調査に行かせることができる。

(4) 黒龍江城からシリムディ川の源流であるイェンケン（インカン）川の河口までは、秋八月ごろであれば馬で一か月余りで到着する。イェンケン川の河口から先は、馬では行くことができないが、徒歩で行けば興安の尾根まで四、五日で達する。これを一ルートとして調べに行かせることができる。

(5) ゲルビチ川の河口から河源までは、秋八月ごろは馬で行けば十日余りで達するが、馬が食べる草のない場所がある。それから先は崖と岩ばかりなので、徒歩でも馬でも行くことはできない。

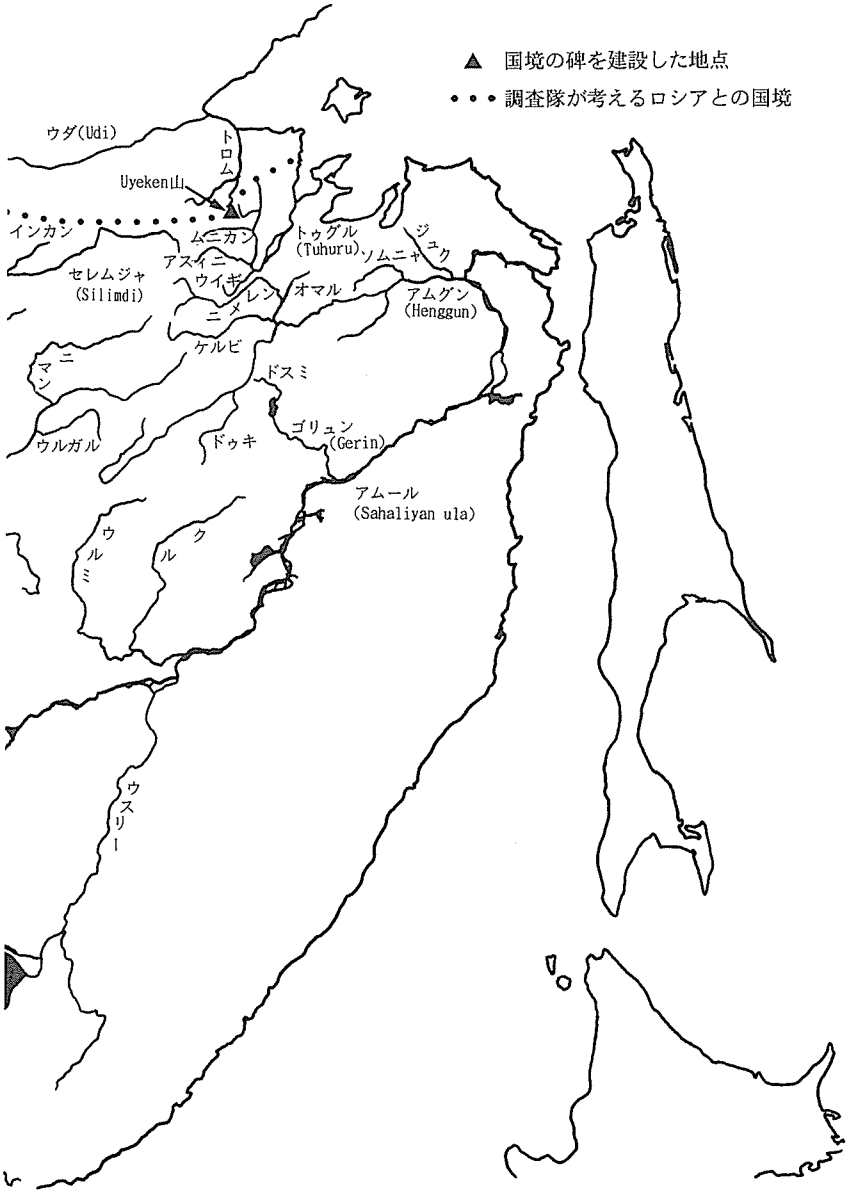
(6) 黒龍江城から丸木船で行けば、ニオマン川の源流であるオロンキ（ニマン）川の河口までは、一か月余りで到着する。それから先は崖と岩ばかりなので、徒歩でも馬でも行くことはできない。

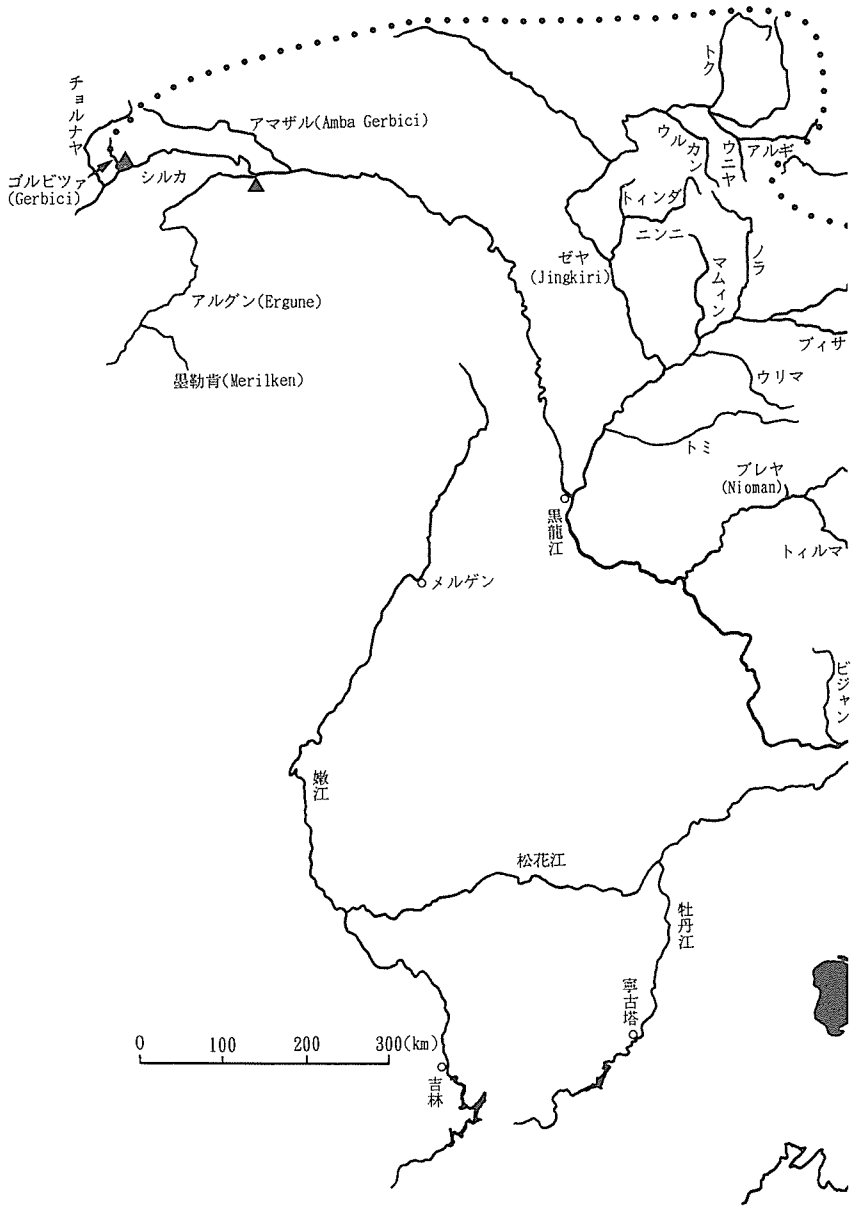
一方サルトゥとトゥンボーは、次のルートを提案した。

興安まで到達する陸路を知るものはいない。ゲリン・ヘングンなどの河川は、興安から流れ出ているので、氷が割れたら船や丸木船で、(7)ゲリン・(8)ヘングン・(9)海岸沿いの三ルートから調査に行かせることができる。

これらの計画は、議政王たちの協議をへて、二月十四日に帝にほぼそのとおりに上奏された。ただし(5)と(6)に関しては、途中から先は崖と岩ばかりで、徒歩でも馬でも行けないというが、もし「先に行くことができる場所があれば行くように。行くことができず、通り抜ける場所がなければ、到達した地点からひきあげるように」と、修正されたのであった。二月十七日に康熙帝はこれを承認して、同時に調査に派遣すべき高官を推薦するように、兵部に命令した。

兵部はただちに調査隊の人選を行ない、その日のうちに康熙帝に上奏した。帝はその中から以下の十一人を選んで、二十二日に兵部に通知している。[7] すなわちメルゲンを出発する三隊（(1)～(3)）には、正白旗満洲都統ランタン・正紅旗満洲副都統ジョーサン・鑲黄旗漢軍副都統シャナハイ・索倫総管アンジュフの四人を、黒龍江を出発する三隊（(4)～(6)）には、左翼前鋒統領ムトゥ・正黄旗蒙古都統・三等公ノミン・鑲紅旗蒙古副都統フワシャン・黒龍江副都統ナチンの四人を、寧古塔から出発する三隊（(7)～(9)）には、鑲藍旗蒙古都統バハイ・鑲白旗漢軍副都統スヘ・吉林副都統バルダの三人をあて


▲ 国境の碑を建設した地点
• • • 調査隊が考えるロシアとの国境
ウダ(Udi)
トロム
Uyekenlu
インカン
ムニカン
アスイニ
ウイギ
セレムジャ
(Silimdi)
トゥグル
(Tuhuru)
ソムニャ
ジエク
レン
オマル
アムグン
(Henggun)
ニメ
ケルビ
マニン
ドスミ
ゴリュン
(Gerin)
ウルガル
ドゥキ
アムール
(Sahaliyan ula)
ウルミ
クル
ウスリー



アムール川左岸の支流略図

ることになった。

選ばれた十一人の中で、まずランタンは、歴史の分岐点となった一五九三年のグレの戦いで、大功を建てたウリカンの孫であった。ランタン自身もアルバジンの攻防戦では、清軍の先頭に立って戦った経歴をもち、また前年に行なわれたロシアとの国境交渉では、ソンゴトゥとともに清側を代表した。[8] ジョーサンは三十二年に督捕侍郎に進むが、三十四年に革職になったので、詳しいことはわからない。[9] シャナハイについては、のちに寧古塔副都統から寧古塔将軍を歴任し、康熙四十年にはサブスの後をうけ黒龍江将軍に就任したことはわかっているが、詳細は不明である。[10] それからアンジュフは、かつて吉林と寧古塔の副都統の地位にあったときに、新満洲佐領に編成したばかりの少数民族を、松花江下流付近から東北の各地に移住させるのに功績があった武将である。それにより康熙十七年（一六七八）には盛京将軍に昇進するが、その後帝の忌避にあって地位を追われた。しかし二十三年のトゥグル川遠征と翌年のアルバジン攻略の功績により、索倫総管の職に復帰していた。[11]

黒龍江を出発する三隊を率いる高官の中で、ムトゥは三藩の乱の討伐に加わって、左翼前鋒統領まで昇進したが、アムール左岸の調査を行なった後、まもなくして歿している。[12] 次にノミンは、かつて正黄旗満洲都統・撫遠大将軍・中和殿大学士を歴任して、三等公に封ぜられたトゥハイの子で、トゥハイの死後に三等公を世襲した。ノミンは康熙二十六年に正黄旗蒙古都統に任命されて以来、三十二年に歿するまでその地位にあった。[13] フワシャンに関しては、手がかりはほとんどない。またナチンは満洲正紅旗に属していたが、本来は朝鮮族の出身であったといわれる。[14]

アムール川の下流を調査するバハイは、順治十六年（一六五九）に病死した父シャルフダの後を継いで以来、康熙二十二年（一六八三）に免職になるまで、寧古塔将軍として北辺を防衛する重責を担った。寧古塔将軍の職を退いた後は、二十三年から鑲藍旗蒙古都統に就任していた。[15] 残るスヘとバルダについては、詳しい経歴はわからない。

調査隊の構成についても、同じころに決定している。それに関して、兵部は二月二十五日に次のように上奏した。すな

わち陸路を行く隊の構成は、それぞれ官（janggin）三人と兵五〇人とし、これに対して水路を行く隊は、官三人と兵および水夫五〇人で構成して、みな同程度の規模とする。このうちメルゲンから出発する三隊には、ソロンとダグルの官と兵をあてることにし、黒龍江から出かける三隊には、黒龍江に駐屯する八旗の官と兵をふりむけ、そして寧古塔を起点とする三隊は、吉林と寧古塔の八旗の官と兵で編成させるという内容であった。[16]

ところが康熙帝は兵部の上奏に不安を感じて、兵部に対して北京にいるロシア人たちに、興安（大興安）までのルートを尋ねてから、再度上奏するように命じた。[17] 清との対立が激しかったころ、ロシア人の中には自ら清に投降するものや、捕虜となりそのまま中国に留まるものがいた。康熙帝はかれらを北京に集めて佐領に編成し、一部のものには官職まで授けるほどであった。[18] これらのロシア人は、過去にアムール川の左岸地域で活動していたので、中国人よりもその地域の地理に明るいと考えられていた。

そこで兵部は、改めて北京在住のロシア人に質問を行なったが、かれらもまた、この方面の地理に詳しくないことが明らかになった。ロシア人たちは、メルゲン関係の三ルートと、寧古塔から出発するゴリュン川と海岸沿いの二ルート、さらには黒龍江城を発ってブレヤ川の上流方向に行くルートについては、みな知らないと答えた。だが残る三ルートに関しては、過去に踏破した経験をもつものがいた。たとえばラサリ［ラザリ］は、アルバジンからセレムジャ川まで、船に乗って一か月余りで達したことがあるという。また領催オリクシ［アレクセイ］は、ゴルビツァ川の河口から河源までは徒歩で十一日かかり、それからさきは冬季雪が積もっていたので、崖や岩ばかりの場所をスキーをはいて、七日目にトゥグル川まで到達したと語った。しかし興安の名は、聞いたことがないという。さらに領催シトゥバン［ステパン］の証言は、最も詳細であった。アムグン川の河口から上流に丸木船で二十日上ると、ニメレン川に達し、それを五日溯った後陸上を徒歩で四日行くと、トゥグル川に達するという。それから徒歩で二十五日行くと、ウダ川に至るが、その間は草は生えず、木と苔だけであった。アムグン川とウダ川に居住するのは、キレルとオロンチョンばかりであり、山道はたくさんあるが、

しかし興安の名は、知らないと答えた。[19]（鉤括弧内は、推定できるロシア人の名前）

ロシア人の回答を待って、兵部は二月二十七日に再び上奏した。その内容は、当初に計画した九ルートの調査のうち、(1)から(4)までの四隊は、黒龍江将軍たちが国境までの日程とルートを調べて上奏しているので、始めの通りに調査させる。さらに(5)から(9)までの五ルートについては、両将軍が地形を知るものを調べているうえに、ロシア人の中にはアムグン川からウダ川まで行ったものもいるので、計画通りに出発させ、現地のキレルやオロンチョンに興安を尋ねて、必ず頂上まで行くようにし、もしも前進できなくなったときは、到達したところまでで引き返すようにさせたいというものであった。[20]

康熙帝は、兵部の上奏を基本的に承認して、同時に各調査隊に、ロシア人を一人ずつ北京から随行させることを命じた。一行は三月中旬に北京を出発して現地に向かったが、[21]索倫総管アンジュフと黒龍江副都統ナチンは、メルゲンと黒龍江で、そして吉林副都統バルダは、吉林でこれに合流したとみられる。また調査隊の中には、石碑の建設と地図の作成に従事する石工や画工なども含まれており、さらに高官の親丁や下僕も、北京から従っていた。[22]

これよりさき調査隊の一員に決まったバハイは上奏して、国境を調査することをロシアに通知するかどうか尋ねている。二月二十五日の段階では、兵部と理藩院がこれを協議することになったが、[23]最終的には清はロシアに通知することを決定したらしい。同年にゴロヴィーンの手紙をもって北京に向かっていたロンシャコフは、チチハルまできて、国境の調査を通知する文書を携えてネルチンスクに急ぐ清の使者と出会った。なおロンシャコフは四月二十一日（ユリウス暦五月十九日）から五月二十四日（六月二十日）まで北京に滞在して、帰国の途についたが、その途中で清の調査隊が、アムール川の左岸地域に向かったことを知った。[24]ロンシャコフの記述は、清の記録と完全に一致する。

① *Русско-китайские отношения в XVII веке*, том 2, Москва, 1972, стр. 524～527.

② 『寧古塔副都統衙門檔案』第二九冊、雍正十二年八月十九日の条、そして『黒龍江将軍衙門檔案』第一冊、康熙二十三年八月十八日、八月二十五日、十月二十日、十月二十七日および第三冊、康熙二十四年三月十一日の条。なお拙稿「十八世紀末アムール川下流地方の辺民組

織」（『人文学科論集』（鹿児島大学法文学部）第三四号、一九九一年）

註(29)、楠木賢道「黒龍江将軍衙門檔案からみた康熙二十三年の露清関係」（『歴史人類』第二四号、一九九六年）を参照。

③ *Русско-китайские отношения в XVII веке*, том 2, стр. 556, 557.

④ *Русско-китайские отношения в XVII веке*, том 2, стр. 510, 511.

⑤ Sebes, J., *The Jesuits and the Sino-Russian Treaty of Nerchinsk (1689)*, Rome, 1961, pp. 287.

⑥ 『黒龍江将軍衙門檔案』第一〇冊、康熙二十九年三月五日の条。

⑦ 『黒龍江将軍衙門檔案』第一〇冊、康熙二十九年三月十四日の条。

⑧ 『八旗通志初集』巻一五三郎談伝。

⑨ 『清実録』康熙三十二年十一月戊辰、および三十四年八月辛丑の条。

⑩ 『清実録』康熙四十年二月乙丑の条。

⑪ 『八旗通志初集』巻一五一安珠瑚伝。また拙稿「康熙前半におけるクヤラ・新満洲佐領の移住」（『東洋史研究』第四八巻第四号、一九九〇年）九〇、九一頁を参照。

⑫ 『八旗通志初集』巻二〇五穆図伝。

⑬ 『国朝耆献類徴初編』巻二七五諾敏伝。

⑭ 『黒龍江志稿』巻四四職官志、および『八旗満洲氏族通譜』巻七二韓尼伝。

⑮ 『満洲名臣伝』巻一〇巴海伝。また拙稿「康熙前半におけるクヤラ・新満洲佐領の移住」第一章を参照。

⑯ 註⑦を参照。

⑰ 註⑦を参照。

⑱ 吉田金一『近代露清関係史』（東京、一九七四年）一九五、一九六頁を参照。

⑲ 註⑦を参照。

⑳ 註⑦を参照。

㉑ 註⑦を参照。

㉒ 『黒龍江将軍衙門檔案』第一四冊、康熙二十九年三月二十六日、および第一五冊、康熙二十九年五月十五日の条。

㉓ 註⑦を参照。

㉔ *Русско-китайские отношения в XVIII веке*, том 1, Москва, 1978, стр. 8.

なお吉田『ロシアの東方進出とネルチンスク条約』二九七頁を参照。

第二章　アムール川左岸調査の概要

三月中旬に北京を発って北に向かったランタン・ジョーサン・シャナハイ・ムトゥ・ノミン・フワシャンらの一行は、メルゲンには五月初めに、それから黒龍江には五月上旬に到着する見通しであった。①

その間に調査隊の基地となるメルゲンと黒龍江においては、調査に同行する官と兵の人選や、調査に使用する船舶その

表1　アムール川左岸調査隊の構成と調査内容

調査地	調査隊の構成	調査内容
(1) Merilken川→アルグン川の河口	正白旗満洲都統 Langtan 正紅旗満洲副都統 Joosan	アルグン川の河口に碑を立てる
(2) ゼヤ川の源流→興安	鑲黄旗漢軍副都統 Šanahai 索倫総管 Anjuu	Bahana まで水路、それから馬で行く予定だったが、Bahana で待機していた馬の大半が死亡したので、計画を変更
(3) セレムジャ川→Yengken 川の河口→興安	左翼前鋒統領 Mutu	
(4) ゴルビツァ川の河口→源流	正黄旗蒙古都統・二等公 Nomin 鑲紅旗蒙古副都統 Huwašan 黒龍江副都統 Nacin が分担	ゴルビツァ川の河口東岸に碑を立てる
(5) ブレヤ川→Olongki（Olonki）川の河口→興安		
(6) ゴリン川→アムグン川の源流	鑲白旗漢軍副都統 Suhe	Uleci 村の八戸を従えた
(7) アムグン川→ニメレン川→トゥグル川	鑲藍旗蒙古都統 Bahai	Uyeken 山に碑を立てる
(8) サハリン・オホーツク海沿岸	吉林副都統 Balda	サハリンの五十三戸を従えた

他の準備にとりかかった。ところが三月一日と十四日に到着した二通の兵部の文書は、黒龍江将軍サブス・索倫総管マブダイと員外郎ダライが協議した当初のプランを、大きく変更する内容のものであった。[2] 最初の計画によれば、全部で六ルートあるうち、(2)アルグン川の河口からメリルケンに至るまでと、(6)ブレヤ川の河口から源流のニマン川の河口に至るまでの二つのルートだけで、船舶を使用する予定であったが、北京からの知らせによると、六隊すべてが船舶を使うことになったという。また調査隊はもともと八月を期して、目的地に出発する予定であったが、やはり兵部の通知によって、高官たちが北京から到着し次第、ただちに行動を起こすことに変更になった。調査に船舶を用いる以上、冬になり河川が凍結する前に、調査を終了しておきたかったからである。なお黒龍江を発ってゴルビツァ川を溯る一行だけは、水・陸二

手に分けることになって、船で行くものは官二人と兵・水夫など三十人で構成し、陸上を行くものは官一人と兵二十人からなり、五月上旬までにメルゲンに入って、高官が到着するのを待たせた。[3]

同時期に吉林方面に向かったバハイとスヘに関しては、『寧古塔副都統衙門檔案』に記載が残っていないので、詳しいことはわからない。しかしかれらもまた、バルダと現地で落ち合って、計画された調査地に出かけたのである。

ここから先は各調査隊が、実際に踏査したルートをたどってみることにする。まずメリルケン方面に出かけた隊は、ランタンとジョーサンが指揮していた。ランタンとジョーサンには、ロシア人の驍騎校オゲファン［アガフォン］と、画工・石工などが随行していた。[4] 最初の計画では、メリルケンまで陸上と水上二手から調査を行なう予定であったが、実施の段階になって二つの隊は合同し、ランタンとジョーサンは行動をともにしたと考えられる。『八旗通志初集』巻一五三郎談伝には、

（康熙）二十九年三月、旨を奉じて副都統詔三［ジョーサン］とともに、厄里谷納（アルグン川）河口に往き交界牌を立つ。五月十五日、黙爾根（メルゲン）城を経て、興安嶺を越ゆ。羅刹猶ほ屋十余間有り、田禾地に満つるを見る。……郎談其の屋を毀た使めて、其の資を給ひ、其の禾を刈りて載帰するを允す。羅刹等悦拝して、嶺を度りて去る。二十一日、厄里古納に至り、牌を河口石壁の上に立て、清・漢・鄂羅斯・蒙古・里的諾五様の字を鐫り畢りて還る。

と、調査隊の行動が記されている。『黒龍江将軍衙門檔案』と併せて考えると、三月は命令を受けて、ランタンらが北京を出発したときで、五月十五日は、メルゲンを発ちメリルケンに向かった日であろう。これによると、ランタンらの調査隊は陸路大興安嶺を越えて、メリルケンに到着したらしい。それから右岸に残っていたロシア人の住民を清の領内から退去させた後、二十一日にアルグン川の河口まで進んで、五種類の文字を彫った牌を付近の岸壁上に立てた。ランタンらはメリルケンからは水路を使って、アルグン川河口を経てアムール川へと下って行ったと考えられる。なおこの隊は、一か月分の食料を携帯していた。[5]

ゼヤ川を溯って興安をめざしたのは、シャナハイとアンジュフが率いる調査隊であった。シャナハイらは、四か月分の食料を装備し、ロシア人の領催と画工をともなって出発した。『吉林通志』巻八七安珠瑚伝附王燕緒安将軍行状に、次の記載がみえる。

後に、鄂羅斯と界を立つ。公は副都統沙那海〔シャナハイ〕と偕に、同に精奇里江（ゼヤ川）に至る。（以下略）

ゼヤ川流域の調査に関しては、『黒龍江将軍衙門檔案』の記載が具体的で詳しい。康熙二十九年六月二十八日の条には、シャナハイとアンジュフが、ゼヤ川の沿岸にあったバハナという地点から、サブスらに対して途中経過を報告した記事が載っている。それによると、シャナハイらは出発前にメルゲンで、ガイド役のものと協議して、綿密な計画を練っていた。この時期はちょうど雨季にあたり、道路はぬかるむうえに、虻や蚊が多くて馬で行くことはむつかしかった。そこで調査隊は小型の船舶に乗って黒龍江城を発ち、六月九日にバハナに到着した。計画では、バハナからは船を馬に代えて進むつもりであったが、予めバハナに送った馬一九〇頭のうち、一七〇頭余りが途中で伝染病にかかり死んでしまった。そのためにシャナハイとアンジュフは計画を変更して、

われわれはバハナから馬に乗って興安に達するといったのを中止して、船・白樺船・板船・丸木船でできるだけ溯って、興安を探しに行く。板船・丸木船で進めなくなったら、もし徒歩で進めれば徒歩で行く。万一旱魃の年にあたっておれば水がないので、板船・丸木船では興安に近づくことはできないし、また徒歩でも進めないかもしれない。そのときには引き返して、秋八月ごろに来たいと考える。

と報告する。サブスは報告を受けると、すぐに兵部に対して、シャナハイたちにもう一度馬を与えて、八、九月中に再度出発させるかどうかを問い合せた。兵部は、興安に到達できなかった場合は、体勢を立て直して再び出発させ、必ず目的地まで調査するようにしたいと、七月二十一日に上奏したが、ところが康熙帝は、

どうして何度もそこへ行くのか。到達できなければ、それまでとする。

表２　ゼヤ川（Jingkiri ula）水系の支流

現在の河川名	ランタン作成の地図	『黒龍江将軍衙門檔案』康熙四十九年十一月十二日（水源）		備　考
Zeia	Jingkiri	Jingkiri ula	（北興安）	アムール川と合流
Argi	Argi bira	Argi bira	（北興安）	ゼヤ川と合流
	Elge bira	Elge bira	（北興安）	Argi 川と合流
Un'ia	Unen bira	Unen bira	（北興安）	Argi 川と合流
Urkan	Urkan bira	Urkan bira	（北興安）	Argi 川と合流
		Urge bira	（北興安）	ゼヤ川と合流
	Nelhesuhi bira	Nelhesuhi bira	（北興安）	ゼヤ川と合流
Tok	Tok bira	Tok bira	（北興安）	ゼヤ川と合流
Ninni	Ningni bira	Ningni bira	（北興安）	ゼヤ川と合流
Tynda	kindu bira	kindu bira	（北興安）	Ningni 川と合流
	Tiyenio bira	Tiyenio bira	（北東興安）	Ningni 川と合流

表３　セレムジャ川（Silimdi bira）水系の支流

現在の河川名	ランタン作成の地図	『黒龍江将軍衙門檔案』康熙四十九年十一月十二日（水源）		備　考
Selemdzha	Silimdi bira	Silimdi bira	（北興安）	ゼヤ川と合流
Inkan	Yengke bira	Yengken bira	（北興安）	Silimdi 川と合流
	Ormolko bira	Ormolakū bira	（北東興安）	Silimdi 川と合流
Byssa		Biša bira	（北東興安）	Silimdi 川と合流
Nora	Nara bira	Nara bira	（北興安）	Silimdi 川と合流
Mamyn		Mumin bira	（北東興安）	Silimdi 川と合流
	Ungge bira	Ungge bira	（北東興安）	Silimdi 川と合流

と、意外な返答をしている。⑥

後述する如く、調査が終了した後に、ランタンが作成したと推定される地図では、ゼヤ川の水系を詳しく描き、トク・アルギ・ニンニなど合計九本の支流の名をあげている。⑦このうち最も上流にある支流はネルヘスヒ川で、シャナハイらの調査隊も、大体そのあたりまでは踏査したと思われる。

ゼヤ川の上流、セレムジャ川の源流を調査したのは、ムトゥらの一行であった。かれらもまたロシア人と画工をともない、四か月分の食料をもって、黒龍江を出発している。⑧ムトゥを案内したのは、オロンチョンのハラダ、リブディンゲであった。⑨

ランタンの地図をみると、セレムジャ川水系の支流として、イェンケ・ナラなど全部で四本の河川が描かれている。イェンケ川は現在のインカン川にあたり、ムトゥらはこの川を目標に調査を行なった。

残る二隊のうち、ゴルビツァ川を陸路源流まで遡る兵二〇人には、黒龍江において一か月分の食料を支給して、追加する分についてはメルゲンで調整し

表4　ブレヤ川（Nioman bira）水系の支流

現在の河川名	ランタン作成の地図	『黒龍江将軍衙門檔案』康熙四十九年十一月十二日（水源）	備　考
Bureia	Nioman	Nioman bira　（北東興安）	アムール川と合流
Niman	Olongki bira	Olongki bira　（北東興安）	Nioman 川と合流
Urgal		Urgal bira　（北東興安）	Nioman 川と合流
	(Silimdir Bira)	Silimdir bira　（北東興安）	Nioman 川と合流
Tyrma	Siyarmi bira	Siyarman bira　（東興安）	Nioman 川と合流

たことがわかっている。[10] しかしこの一隊をだれが指揮したのか、肝心な問題は不明である。当初から清は、アルグン川と並んでゴルビツァ川の岸辺にも、国境の碑を建てることを計画しており、ゴルビツァ川に向かった調査隊が、その使命をになったと思われるが、それに関する記述は残っていない。しかしランタンらの例から類推すると、ゴルビツァ川の調査隊にもそのための人員を配置したはずで、調査隊はアルグン川と同程度の碑を建設したものと考える。[11]

ブレヤ川の源流を調べに行った隊についても、詳しいことはわからない。ランタンの地図には、ブレヤ川の水系では、シヤルミとオロンキ二つの支流をあげるだけである。調査の目標になったオロンキ川は、現在のニマン川にあたる。

続いてアムール川の下流方面に向かった調査隊について、調査の概要を明らかにしてみよう。かれらに関しては、楊賓の『柳辺紀略』巻一がこれまで唯一の史料であった。それによると、

威伊克阿林は、極東北の大山なり。上に樹木なく、惟だ青苔を生ずるのみ。厚さ常に三、四尺。康熙庚午（二十九年）阿羅斯と国界を分かち、天子鑲藍旗固山額真巴海［バハイ］等に命じて、三道を分かちて往って視べしむ。一は亨烏喇（アムグン川）より入り、一は格林必拉（ゴリュン川）より入り、一は北海より繞りて入る。見る所はみな同じ。遂に碑を山上に立つ。碑に満洲・阿羅斯・喀爾喀文を刻む。

とある。著者の楊賓は、罪を得て寧古塔に流された父楊越と母に会うために、康熙中ごろに寧古塔へ旅行したが、その間に自ら見聞した事柄をつぶさに記録した貴重な文献が、『柳辺紀略』である。楊賓が旅行に出発した正確な年次は、これまで不明とされていたが、『楊大瓢先生雑文残稿』によると、かれは康熙二十八年の後半に寧古塔へと旅立ったのである。[12] それから翌年まで寧

古塔に滞在して、バハイが行なった調査の一部始終を目撃していたらしい。楊賓が証言する内容は、前述した調査隊のルートと完全に一致する。

ここからは『寧古塔副都統衙門檔案』に拠って、調査隊のたどったルートをあとづけようと思うが、残念なことにそれには康熙二十九年の部分が欠けており、調査に関する檔案は一つも残っていない。ただ後世の檔案に引用されて、断片的な記述がかろうじて伝わるので、今はそれを手がかりに考察を進めることにする。たとえば同書雍正十二年正月二十六日の条によると、バハイ以外の二つの隊について、

漢軍副都統スヘは、勅旨に従ってゲリン（ゴリュン川）を調査に行って、ゲリンからヘングン（アムグン川）を越え、源流の方に溯るとき、ウレチ（ウリケ）というところに達して、貢納をしていないグルバダなど八戸を従え、徴収した貂皮八枚を管轄官庁に引き渡したいといった。同年に吉林副都統バルダは……ヘングンなどの地方に国境の場所を調べにいき、海島に住むチュウェニ氏族とドボノンゴ姓、東海の岸にいたクイェ姓・オロンチョン姓、全部で五十三戸を従属させて、各戸一枚ずつ五十三枚の貂皮を徴収した、と上奏した。（以下略）

と伝えている。まずスヘが率いる隊であるが、ゴリュン川を溯って、おそらくエヴォロン湖からドスミ川を経て、アムグン川の中流に出たと思われる。それからはアムグン川を上流に向かって、その河源と分水嶺を調査したとみられる。スヘらが従えたウレチという村は、クル川沿岸にあったウリケ（ウリカ）村と推定されるので、[13] 調査隊はアムグン川を引き返してクル川に入ったのであろう。

バルダの一行は、アムール川の河口から海上に出て海岸線に沿って北上した。ここでいう海島は、サハリンのことである。チュウェニ氏族というのは、チュウェニ村（チフナイ川付近）やビシケ（プイスキ）村などサハリンの北西海岸にいた、ニヴフ族のチフィヌング氏族である。[14] ドボノンゴ姓についての詳細は不明であるが、かれらもやはり北西部の沿岸に居住した集団であるとみられる。

これに対して東海の岸に住んでいたクイェ姓とオロンチョン姓であるが、『寧古塔副都統衙門檔案』の別の箇所を見ると、たとえば乾隆七年十月二十八日の条に「海島にいるクイェ・オロンチョンなどの村六十五、戸数二百六十八」とあることや、同じく乾隆十九年正月二十四日の条に「クイェ・オロンチョン・カダイェ（カディイェ）・ワルル・チョリル・ドボノンゴ・チュウェニ・プニヤフン・シュルングルなどの氏族のものは、東海の島に居住する」とあることから、かれらは大陸ではなく、海上の島に居住していたとみられる。後者にみえる氏族の中で、チュウェニ氏族がサハリンにいたニヴフ族であったことは、すでに論じたとおりである。さらにプニヤフン（プニャグアン）氏族も、サハリン北端のボモト（ポムイド）村にいたニヴフ族の一氏族である。[15] したがってこれらの史料に海島とか東海の島とかあるのは、みなサハリンのことであり、クイェとオロンチョンの二集団がいたのも、サハリンの東海岸であったと考えられる。クイェは、サハリン中部のタライカ付近にいたアイヌのことであろう。西海岸からタライカまでは交通路が通じていて、西海岸に比較的に近かったからである。[16] 他方オロンチョンというのは、サハリンで唯一トナカイを飼養した北東部のウイルタ族を指すと考えられる。ちなみに中国においてサハリンを庫頁島と呼ぶのは、クイェに由来する。

ところでバルダらの調査隊が、アムール川の河口からサハリンにまで到達したことは、イエズス会士が記した史料にもうかがうことができる。たとえばジェルビヨンの日誌によると、一六九一年一月二十四日（グレゴリオ暦）に、学問の進講が終わった後の会話で、康熙帝はジェルビヨンに、「この年東のかたアムール川の河口に人を派遣したが、そのものたちは河口のむこうは七月（Juillet）というのにまだ海が結氷していて、付近の土地には人はまったく住んでいないと報告した」と語ったといわれる。[17] 一六九一年一月二十四日は、康熙二十九年十二月二十六日に該当し、この年というのは康熙二十九年のことである。グレゴリオ暦の七月は、陰暦の五月十五日から六月十五日までにあたっており、康熙帝が派遣したという人びとが、バルダの一行を指すことはほぼまちがいない。また康熙二十九年に当時北京に滞在したイエズス会士のトマスが作成した地図には、アムール川の河口よりやや南の海上に大きな島が描かれていて、フィェ王国（Regnu.

Huye）と読むことができる。[18] フイェとはクイェの訛音であって、サハリンのことである。トマスはこのときすでにバルダの調査について知っていて、その成果をいち早く自らの地図に採り入れたのである。[19]

本隊であるバハイの隊が進んだのは、アムグン川を溯るルートであった。バハイはランタンと同様に、調査の終了後にその結果を地図にして報告していた。後述する如く『黒龍江将軍衙門檔案』康熙四十九年八月二十三日の条によると、一統志館は、黒龍江将軍の報告に不備があることを、バハイの地図と比較して次の如く指摘する。

さらに『大絵図』とバハイが描いて持ってきた図を見ると、チチガル（チチハル）城の東北のかた、ヘングン（アムグン）川の西にドゥキ川がある。この川は西から東に流れて、ヘングン川に流入する。ヘングン川の東の源流を、ヘメン川という。この川は北西から南東に流れて、ヘングン川となる。ヘングン川の北に、ゲルビ（ケルビ）川がある。この川は南西から北東に流れて、イミレ（ニメレン）川に入る。イミレ川の北東には、アマル（オマル）川がある。この川は北東から南西に向かって、イミレ川に注ぐ。イミレ川の北東に、シムル川がある。この川は北東から南西に流れて、イミレ川に入る。ヘングン川の南に、一つの川がある。この川は南西から北東に向かい、ヘングン川と合流する。ヘングン川の北に、ルク（ジュク）川がある。この川は北から南に流れて、ヘングン川に注ぐ。ヘングン川の北側にサムニン（ソムニヤ）川がある。この川は北から南に向かい、ヘングン川と合流する。ウエルギ（ウイギ）川とアサルニ（アスィニ）川二つの間に、ニオワクタン川がある。この川は北西から南東に流れて、トゥフル（トゥグル）川に入る。アサルニ川とムニケ（ムニカン）川二つの間には、タリン川がある。この川は北西から南東に流れて、トゥフル川に入る。タリン川とムニケ川の間にミョーワン（メワンジャ）山がある。ムニケ川の北側にミイェミレ川がある。この川は北から南に向かって、ムニケ川に注ぐ。ムニケ川の東にエルゲケン川がある。この川は北から南に流れて、トゥフル川に入る。

（原文ではヘンクンとするが、ヘングンに訂正する。）

この部分は、アムグン川とトゥグル川の水系について述べたものである。括弧の中は、ロシアの現代地図にみえる地名である。方位の問題はしばらく置いて、ここにあがった川と山の名称は、現代の地名と比較しても、非常に正確である。こ

れは、バハイの一行がこの地域を実地に踏査して、十分な調査を行なった成果と考えてよい。

バハイらの調査隊が最終的に到達した地点は、どこだったのであろうか。ここでもう一度『柳辺紀略』に、注目してみよう。バハイらは威伊克阿林に満洲語・ロシア語・モンゴル語三体の碑を立てたといわれるが、ここにいう威伊克阿林は、『黒龍江将軍衙門檔案』にいうウイェケン山（Uyeken alin）のことであろう。[20] 吉田氏が発見されたランタンの地図によると、トロン（トロム）川の支流、キルフィ川の上流に、ウイェケンという川があり、そのウイェケン川の西に山が一つそびえている。ウイェケン山はこの山とみられる。[21] 後述するようにバハイとランタンは、トゥグル川水系とトロム川水系を分ける山脈をロシアとの国境と考えるので、ウイェケン山はその山脈を形成する一山である。バハイはこのとき国境の碑を、ウイェケン山のふもと、トゥグル川からトロム川に通じるルート上の峠近くに建設したと推定されるが、しかしその碑は、雍正初めには早くも倒壊してしまった。[22] なおランタンの地図には、ウイェケン山の北にさらに、トロン川とキルフィ川が描かれているが、ウイェケン山の国境の碑付近が、バハイ調査隊の到達点であろう。

さて黒龍江副都統オンダイが黒龍江将軍サブスに送った七月十日付けの文書によると、興安を調査に行ったものが、黒龍江にぞくぞく帰ってきているという。[23] アムール川左岸の調査は、このころに一応終結したのである。

① 『黒龍江将軍衙門檔案』第一四冊、康熙二十九年三月十五日の条。ただし一行が実際に到着したのは、それより十日近く遅れたもようである。
② 『黒龍江将軍衙門檔案』第一四冊、康熙二十九年四月二十一日の条。
③ 『黒龍江将軍衙門檔案』第一五冊、康熙二十九年五月三日の条。
④ 『黒龍江将軍衙門檔案』第一五冊、康熙二十九年五月十五日の条。
⑤ 註④を参照。
⑥ 『黒龍江将軍衙門檔案』第一〇冊、康熙二十九年八月八日の条。
⑦ 吉田『ロシアの東方進出とネルチンスク条約』附図を参照。以下同じ。
⑧ 註④を参照。
⑨ 『黒龍江将軍衙門檔案』第三〇冊、康熙三十年閏七月二十一日の条。
⑩ 『黒龍江将軍衙門檔案』第一三冊、康熙二十九年五月七日の条。
⑪ 黒龍江将軍が康熙四十九年に調査したときには、国境の石碑はゴルビツァ川河口の東岸に存在したが、それがこのとき建設されたものかどうかはわからない。吉田『ロシアの東方進出とネルチンスク条約』二九四～三〇四頁を参照。
⑫ 同書「晞髪堂詩稿自序」、および「附楊大瓢出塞省親詩文巻」。この

史料については、李興盛氏よりコピーを恵与された。記して謝意を表したい。

⑬ Суник, О. П., О языке зарубежных нанайцев, *Доклады и сообщения Института языкознания АН СССР*, 1958, стр. 168, Долгих, Б. О., *Родовой и племенной состав народов Сибири в XVII в*, Москва, 1960, стр. 605.

⑭ Смоляк, А. В., Родовой состав нивхов в конце XIX－начале XX в, *Социальная организация и культура народов Севера*, Москва, 1974, стр. 194, 195.

また拙稿「十八世紀末アムール川下流地方の辺民組織」表1を参照。

⑮ 註⑭を参照。

⑯ このルートについては、拙稿「間宮林蔵の著作から見たアムール川最下流域地方の辺民組織」（神田信夫先生古稀記念論集編纂委員会編『清朝と東アジア』山川出版社、一九九二年）一五七、一五八頁を参照。

⑰ Du Halde, J. B., *Description géographique, historique, chronologique, politique, et physique de l'empire de la Chine et de la Tartarie chinoise,*（以下 *Description* と省略）vol. 4, Paris, 1735, p. 244,（その英訳は、*A Description of the Empire of China and Chinese-Tartary, together with the Kingdoms of Korea, and Tibet*, vol. 2, London, 1741, p. 331.）

また吉田『ロシアの東方進出とネルチンスク条約』二九七頁を参照。

⑱ Sebes, *The Jesuits and the Sino-Russian Treaty of Nerchinsk* (1689), 附図を参照。なおトマスの地図に関しては、Florovsky, A., Maps of the Siberian Route of the Belgian Jesuit, A. Thomas (1690), *Imago Mundi*, VIII, 1951, を参照。

⑲ 一八〇八年（文化五）に間宮林蔵がサハリンの東海岸ハンゲタライカで目撃した標柱は、かつてこの地を訪れた満洲人が立てたということであるが、その満洲人とはバルダであったかもしれない。後考をまちたい。

⑳ 『黒龍江将軍衙門檔案』第二九〇冊、康熙四十九年正月四日の条。

㉑ 威伊克阿林について、吉田氏はトロム川水源のエルキレ山（標高二三八四メートル、北緯五四度・東経一三五度付近）を、劉遠図氏はトロム川西北のティリスキー（タイカンスキー）山脈の最高峰（標高二二七八メートル）をあてられるが、誤りである。吉田『ロシアと中国の東部国境をめぐる諸問題』一〇二～一〇四頁、劉『《柳辺紀略》所記威伊克阿林界碑補証』（『学習与探索』一九八五年第六期）一三四頁を参照。

㉒ 『清代中俄関係檔案史料選編』（北京、一九八一年）第二八二号檔案、雍正十二年十二月十四日。

㉓ 『黒龍江将軍衙門檔案』第一三冊、康熙二十九年七月十二日の条。

第三章　ランタンの地図と国境の問題

清朝が康熙二十九年（一六九〇）に実施した国境調査は、アムール川地域における最初の試みであり、調査隊の規模と調査の範囲いずれをとっても、中国においては空前絶後の事件であった。しかし調査が終了した時点で、調査隊がいかな

る報告を行なったのか、また清の中央がそれをどう評価したのかということは、既存の文献からは解明することができない。ただ調査を指揮したランタンとバハイが、それぞれ地図を作成したことが知られていて、今のところそれだけが、調査の成果といえるくらいである。バハイ作成の地図は、いまだに所在を確認できないが、ランタンの地図に関しては、吉田金一氏が近年に台北で発見された地図が、そうであると推測されている。吉田氏は、地図の左下に満洲語で「内大臣であったランタンなどが描いて持ち帰った九道の図」という書き込みがあることと、アイグン（黒龍江）とメルゲンは載っているが、チチハルがみえないことなどから、この地図は、ランタンにより康熙二十九年ごろに作成されたと推定されたが、右下にある五十年十二月十三日という漢字の日付については、内府がこれを収蔵したときのものと推測されるに止まった。[1] わたしは、吉田氏の結論は大体正当であると考えるが、作成年代に疑いを残したまま論述を進めることはできないので、この地図の来歴について、もう少し事情を説明しておきたい。

わたしは『黒龍江将軍衙門檔案』康熙四十九年（一七一〇）の条を検索していたときに、ランタンが作成した地図のことを、「内大臣であったランタンなどが描いて持ち帰った九道の図」とか、「内大臣であったランタンなどが調べて持ち帰った図」などと、吉田氏が発見した地図の端に書いてあった名称と、ほぼ同じ名称で呼んでいることを発見した。この時期になって『黒龍江将軍衙門檔案』の中に、ランタン作成の地図が集中的に現われる理由は、『大清一統志』を編纂するためにそれが必要になったからである。周知のように康熙帝は、二十五年にはすでに一統志館を開設して編集に着手した。[2] かつて黒龍江将軍衙門がメルゲンにあったときに、黒龍江将軍は、一統志を編纂するための材料を内閣の一統志館に送ったが、黒龍江将軍がメルゲンからチチハルに移駐した現在、黒龍江将軍管内の地名はすべて、メルゲンに代えてチチハルを規準とする方位・距離で記述されなければならなかった。そのうえ黒龍江将軍が提出した最初の報告は、ランタン作成の図と比較すると、非常に粗略な内容であった。そのために一統志館は、黒龍江将軍に対して管内の地理について再調査を要請し、同時に編集の参考にするために、内閣が保存していた「ランタンなどが描いて持ち帰った九道の図」を黒龍江

将軍のもとに送った。これが、康熙四十八年十一月ごろのことである。[3] それから黒龍江将軍の地元では、黒龍江副都統・メルゲン協領・索倫総管などが内容の再調査を行なったが、依然としてその内容に不備があるために、黒龍江将軍はさらなる調査を命じた。[4] こうして二度、三度同じことを繰り返して、問題点を絞りこんでいった。[5] やがて黒龍江将軍は再調査を終わって、その結果を文書と地図にして中央に送ったが、一統志館はこれにも遺漏を発見して、みたび検討を求めた。[6] このようなやりとりをへて、黒龍江将軍ヤンフらは康熙四十九年十一月十二日に最終的な報告を行なったのである。[7]

『黒龍江将軍衙門檔案』に記されるランタン作成の地図に関する特徴は、吉田氏発見の地図と共通であって、両者は同一のものである。地図の右下に残っていた五十年十二月十三日の日付は、地図の作成年代とは無関係である。ランタンの地図は、それからさらに寧古塔将軍のもとに送られるので、[8] この日付は、それ以後のものである。ランタンが地図を作成したのは、調査が終了した直後であることにまちがいない。ちなみに「内大臣であったランタンなどが描いて持ち帰った九道の図」という字句については、ランタンが領侍衛内大臣に任命された三十一年三月以後に書き込まれたはずであるが、『黒龍江将軍衙門檔案』康熙四十九年の部分では、ランタンの地図の呼び方が一定しないので、この字句もまた四十九年前後に挿入されたと考えられる。

ここからは康熙二十九年の調査が、現代に語りかけるものを考えてみたい。まずネルチンスク条約で両国が国境と定めた、ゴルビツァ川の水源から海岸に達するという山脈の問題である。この山脈の解釈をめぐっては、古くから論争がある。一般にはスタノヴォイ山脈（外興安嶺）とする説が、有力であり、教科書などでも広く採用されている。しかし分水嶺にしかすぎないとする説も存在し、それを無視することはできない。[9]

ネルチンスク条約の正文であるラテン語文では、この山脈を固有名詞で呼ぶことはなく、アムール川の支流の水源であるという条件を述べて、その位置を規定しているにすぎない。[10] 国境線としては、何か漠然としているが、交渉の過程で交換した条約文の草稿でも、みな同様の表現を用いている。[11] これに対して清の漢文献ではこの山脈を大興安（Amba

Hinggan）と呼ぶが、興安という単語はそもそも満洲語には存在せず、モンゴル語からの借用語である。『黒龍江将軍衙門檔案』康熙四十九年の部分を見ると、興安ということばは頻繁に使用されており、各地にある大小の山脈に対して、頭に各方位を付けて一様に「……興安」と呼んでいる。大興安というのは、一般の興安よりは特殊化しているが、それでも外興安嶺とはただちに結びつかない。ところでネルチンスク条約に規定された国境の山脈は、もとをただせばロシアの代表が所持した地図に描かれた山脈のことである。一枚のロシアの地図には、ゴルビツァ川の源流付近からV字型、ないしはY字型の山脈が、真東と東北の方向に一本ずつ描かれており、このうち真東方向に伸びる山脈は、アムール川と平行に海まで達していた。両国は交渉の過程で真東の山脈を国境としたが、これらの山脈はシベリア地図の系統をひくものであって、実在の山脈というよりも、むしろ人間の想像力が作り出した山脈というべきである。[12] ちなみにロシア側が使ったもう一枚の地図（ベイトンの地図）においても、ゴルビツァ川の水源からアムール川の河口まで、両国の国境とみられる山が、弓形に一列になって描かれているが、[13] このように直線的な山脈は、やはりこの地域には実在しない。要するにネルチンスク条約に規定された山脈は、特定の山脈とは結びつかないのである。

それでは清朝の解釈はどうかというと、かれらはこの山脈を実在すると信じていたと考えられる。調査隊がたどったルートを見ると、かれらはネルチンスク条約を忠実に実行して、アムール川左岸の支流であるゼヤ・セレムジャ・ブレヤ・ゴリュン・アムグンの各河川をひたすら源流まで溯って、その水源をきわめようと努めている。かれらにとっては、そうしてつきとめた分水嶺ないし水源の山を結んだ山脈こそが、大興安でありまたロシアとの国境であった。ランタンの地図中に描かれる大興安は、アムール川の北側に東西に連なる大きな山脈がそうである。その山脈は途中で二本に枝分かれして、北側の突端は海中に長く突き出す。ゼヤ川・セレムジャ川・ブレヤ川・アムグン川などのアムール川左岸の支流は、みなその南麓に源を発しており、そしてウダ川は、二本の山脈の間を海に向かって流れている。[14] この山脈は、ネルチンスク条約で合意した国境の条件をすべて満たしている。現在の地図でそれをおさえるならば、調査隊が通過したゼヤ

川・セレムジャ川・ブレヤ川の分水嶺を結んだ線が、実際の国境ということになる。

続いて国境の西端に位置するゴルビツァ川と碑の問題について、考察してみたい。かつてこの問題は、多くの研究者を悩ませたが、ランタンの地図が現われて、すっきりと整理された。すなわちアムール川の上流に、大小二つのゲルビチ（ゴルビツァ）川が存在することを指摘したのは、康熙二十九年の調査に始まるのである。それによると、上流の方から順にゲルビチ・ジョロクチ・アムバ＝ゲルビチ・オル・オルドコンの各河川が、アムール川とその上流のシルカ川に北から流入しており、この中ではゲルビチ川が、最も上流に位置していた。康熙四十九年に『大清一統志』を編纂するために、黒龍江将軍が行なった調査の報告においても、ゲルビチ川とアムバ＝ゲルビチ川の位置関係は、ランタンが調査したものと同じで、一統志館もそれを問題視することはなかった。[15] 一方国境の碑については、ランタンの地図には何も述べないが、康熙四十九年当時、石碑は確かにゲルビチ川の河口の東岸に建設されていた。[16] 清朝は当初に、上流のゲルビチ川をロシアとの国境と解釈していたことはまちがいない。

ところで『大清一統志』の編纂作業と並行して、康熙四十九年（一七一〇）にはレジスらイエズス会士の一行も、黒龍江地区を調査に訪れている。かれらの目的は、アムール川の上流地域を測量することで、ロシアとの国境を確認することも、その中に含まれていた。後にイエズス会士たちが収集した資料に拠って作成されたダンヴィルの地図では、周知のように、アムバ＝ケルベチ（アムバ＝ゲルビチ）川とアジゲ＝ケルベチ（ゲルビチ）川の名称が互いに入れ替わって、ランタンの地図とは反対になっている。そして国境の石碑は、上流のアムバ＝ケルベチ川の河口東岸に描かれているにもかかわらず、両国の国境は下流のアジゲ＝ケルベチ川にあると明記している。一見すると混乱したかにみえるイエズス会士の記述は、かれらのミスで起こったとすることはできない。イエズス会士たちは何かの理由があって、意図的に修正を行なったのである。

イエズス会士が調査に訪れたころの黒龍江の地元では、ゴルビツァ川と碑の所在地に関して、時間の経過とともにその

記憶はあいまいになっていた。たとえば碑の位置について、黒龍江将軍は四十九年の報告で、いったんはゲルビチ川の水源にあるとしていたが、調査をやり直した結果、ゲルビチ川の河口の東岸にあることが判明した。[17] それもそのはずで、碑の場所を知る生き証人は、このときすでにアラル＝アバのソロン、トゥングニ（トゥングネイ）ただ一人となっていた。[18] また康熙五十二年から五十六年に歿するまで、チチハルに流されていた方式済[19]の『龍沙紀略』では、一方では昂班格里必斉河界碑と、碑がアムバ＝ゲルビチ川の沿岸にあったことをいいながら、他方では国境の碑から東に阿集格格里必斉河・卓爾克斉河・昂班格里必斉河とあげて、アジゲ＝ゲルビチすなわちゲルビチ川が、アムバ＝ゲルビチ川より上流にあって、石碑もゲルビチ川の沿岸にあったことをいうのである。わたしは、黒龍江におけるこうした状況が、イエズス会士の見解に反映したと考えている。

似たような混乱は、後の地誌にももちこまれた。すなわち『大清一統志』は、乾隆・嘉慶両時代に前後三度刊行されたが、乾隆年間に成立した二つの版では、ランタンの説を棄てて、イエズス会士の説に従っている。乾隆九年（一七四四）に成った最初の版では、従来の見解を転換して、大格爾必齊河（アムバ＝ゲルビチ）を格爾必齊河（ゲルビチ）の上流に位置させた。そして国境の碑は、大格爾必齊河の東にあるといいながら、他方国境の碑を紹介する箇所では、碑は格爾必齊河の河口の東岸にあると説明する。ところが黒龍江城から碑までの距離一七九〇里というのは、黒龍江城から格爾必齊河までの距離一六九〇里ではなくて、黒龍江城から大格爾必齊河までの一七九〇里に等しいので、この場合の格爾必齊河は、上流の大格爾必齊河のことである。[20] 同様の誤りは、乾隆二十九年勅撰の第二版にも共通している。[21] しかし嘉慶二十五年勅撰（一八二〇）の第三版になると、安巴吉爾巴齊河（アムバ＝ゲルビチ）と吉爾巴齊河（ゲルビチ）の位置関係は、ランタン調査時のものに戻されて、国境の碑も上流にある吉爾巴齊河の東岸にあるとしたので、第二版までの矛盾は解消されることになった。[22] どうして変更されたのかは、不明である。

最後に東部の国境で問題となるのは、オホーツク海に流れこむトゥグル川以北の河川の帰属である。ネルチンスク条約

を厳密に適用するならば、これらの河川はロシアとの中立地域となってしまう。しかし調査隊の解釈はそれとちがって、トゥグル川までを国境と考えていた。上述した如く、バハイが率いた調査隊は、トゥグル川を越えて源流付近に達し、トゥグル川水系とトロム川水系との分水嶺であるウイェケン山に、ロシアとの国境を示す碑を立てた。ランタン作成の地図をみると、ウイェケン山は、ちょうど大興安の東端が海岸に達した付近に存在する。バハイとランタンが考える清とロシアとの国境の東端は、この分水嶺である。かれらの解釈は、ネルチンスク条約と矛盾するようにみえる。しかし現代の地図でこの地域を検討すると、トゥグル川とその南側を流れてアムグン川に合流するニメレン川との間には、高い山は存在せず、両者の距離も相当に接近している。ここを実地に踏査したバハイらにとって、トゥグル川とニメレン川の中間に国境線を引くことはできなかったのである。[23]

二人の考えは、清の公式見解でもあった。『寧古塔副都統衙門檔案』雍正十二年八月十九日の条によると、ネルチンスク条約の交渉に参加していた黒龍江将軍サブスは、ロシアとの間に取り決めた国境について、

（康熙二十八年）ゲルビチなる川から東、東海・トゥグル川に至るまで、東西七千里余り、南北数千里以上を大いに取った。

と述べており、やはりゴルビツァ川とトゥグル川を結んだ線の南側を中国領と考えていた。さらに康熙四十九年の段階でも、清朝はトゥグル川を中国領とする立場を確認している。『黒龍江将軍衙門檔案』康熙四十九年十月二十一日の条によれば、黒龍江将軍ヤンフらのことばとして、次の如く伝えている。

しらべたところ、トゥフル（トゥグル）川を京師の大臣たちは、ロシアとの国境と定めている。

また同年に一統志館が、黒龍江将軍に地名の再調査を依頼した際に、

内大臣であったランタンたちが描いて持ち帰った図をみると、黒龍江の境界にかなり近いところに、北東の方角ではキルフィ川・トロン（トロム）川がある。……以上の山と川で黒龍江の管下にあるものは、チチハル城のどちらの方位にあるのか、何里離れているのか……ということをよく調べて報告してほしい。

と述べる。[24] これによると一統志館の官僚たちが、トゥグル川の北に流れるトロム川とその支流であるキルフィ川を、国境の周辺にあると認識していたことはまちがいない。その後この件に関して、再びトロム川とキルフィ川のことを議論したようすはないので、二つの河川は国境の外にあると断定されたのであろう。実際に『大清一統志』のいずれの版においても、これらの河川名を見つけることはできない。

これに対してイエズス会士たちは、トゥグル川の水系を中国領と考えていないように思える。ダンヴィルの地図をみると、大興安（Hinkan chaine de montagnes）は、ゴルビツァ川などの源流を横切り、ゼヤ川水系やアムグン川水系を囲むように南下して、最後はトゥグル川のかなり南で海岸に達している。地図の中にはトゥグル川も描かれるが、イエズス会士が考える国境は、その南の山脈である。イエズス会士たちは、トゥグル川がオホーツク海に流れこむことを重視して、ネルチンスク条約に従い、それを中立地帯とみなすのである。

トゥグル川をめぐるイエズス会士の考えは、後世に一定の影響を与えることになるが、最も忠実な支持者は、斉召南であった。斉召南は、内府にあったイエズス会士の地図をもとに、『水道提綱』を記述したが、かれはその中で、大興安山がアムール川の北を通って、数千里の距離を連なって、トゥグル川の南で海に達すると考えた。[25] しかしこうした考えは多数意見とはならず、清の公式見解は、トゥグル川の北を境界とする立場で一貫していた。[26]

① 吉田「郎談の『吉林九河図』とネルチンスク条約」三三～三八頁を参照。
② 『清実録』康熙二十五年三月己未の条。
③ 『黒龍江将軍衙門檔案』第二九〇冊、康熙四十九年正月四日の条。
④ 『黒龍江将軍衙門檔案』第二九三冊、康熙四十九年正月七日、二月三日、および二月九日の条。
⑤ 『黒龍江将軍衙門檔案』第二九三冊、康熙四十九年二月二十六日の条。
⑥ 『黒龍江将軍衙門檔案』第二九〇冊、康熙四十九年八月二十三日の条。
⑦ 『黒龍江将軍衙門檔案』第二九一冊、康熙四十九年十一月十二日の条。
⑧ 『黒龍江将軍衙門檔案』第二九四冊、康熙四十九年九月二十二日の条。

⑨ 入江啓四郎「ネルチンスク条約の研究」（アジア・アフリカ国際関係研究会編『中国をめぐる国境紛争』厳南堂書店、一九六七年）三一頁、野見山温『露清外交の研究』（酒井書店、一九七七年）「満文ネルチンスク条約の研究」註㉕を参照。

⑩ ネルチンスク条約の正文であるラテン語条文については、ロシア語訳をみた。*Русско-китайские отношения в XVII веке*, том 2, стр. 645, 646.

⑪ たとえば、*Русско-китайские отношения в XVII веке*, том 2, стр. 563, 571, 574, 583, 593.

⑫ Du Halde, *Description*, vol. 4, pp. 198, 199, また英訳, vol. 2, pp. 313, 314. シベリア地図に関しては、三上正利「スパファリのシベリア地図」（『史淵』第九九輯、一九六八年）などを参照。

⑬ 吉田『ロシアと中国の東部国境をめぐる諸問題』七五～八四頁、第九図を参照。

⑭ 吉田『ロシアの東方進出とネルチンスク条約』附図を参照。

⑮ 註⑦を参照。

⑯ 註⑦を参照。

⑰ 『黒龍江将軍衙門檔案』第二九〇冊、康熙四十九年八月二十三日、および第二九一冊、康熙四十九年十一月十二日の条。

⑱ 『黒龍江将軍衙門檔案』第二九二冊、康熙四十九年九月十二日、および第二九三冊、康熙四十九年閏七月二十一日の条。またソロンに関しては、柳澤明「いわゆる『ブトハ八旗』の設立について」（『松村潤先生古稀記念清代史論叢』汲古書院、一九九四年）一一三頁を参照。

⑲ 李興盛『東北流人史』（黒龍江人民出版社、一九九〇年）二〇九頁を参照。

⑳ 『大清一統志』（乾隆九年）巻三六黒龍江。

㉑ 『大清一統志』（乾隆二十九年）巻四八黒龍江。

㉒ 『大清一統志』（嘉慶二十五年）巻七一黒龍江。

㉓ Ravenstein, E. G., *The Russians on the Amur*, London, 1861, p. 204.

㉔ 註③を参照。

㉕ 『水道提綱』巻二四黒龍江。なお内藤虎次郎「支那史学史」（『内藤湖南全集』第一一巻、筑摩書房、一九六九年）三七四～三七六頁を参照。

㉖ 一例をあげると、『大清一統志』（乾隆九年）巻三五寧古塔。

おわりに

ネルチンスク条約を締結した直後、清においてはアムール地方に関する数種類の地図が作成された。それらはみなロシアの地図の影響を受けており、中央には国境となった独特なY字型の山脈を描いている。[1] ランタンの地図もその一つであるが、しかし河川の名称の詳細さと正確さで、他の地図よりも際立っている。また同時期のロシアの地図と比較しても、

格段に優れている。ランタンの地図が、このように当時として最高の精度をもつことができたのは、地道な実地調査の成果を基礎にしていたからである。[2]

同時にアムール地方の地理に関する清人の知識は、康熙二十九年の調査で頂点に達した。ネルチンスク条約の後、清はアムール川の左岸地域を軍政下に置き、ビジャン川を起点とする線で東西に分割して、黒龍江将軍と寧古塔将軍に分掌させた。[3] しかしそれ以後も正規軍である八旗の兵は、左岸地域に常駐することはなく、かれらが駐防した地域は、アムール川の右岸、つまり南岸に限られていた。ただ両将軍が派遣するわずかな兵が、定期的にこの地域を見回るだけであった。[4] したがって左岸地域に関する地理知識は、このときからほとんど進歩せず、ランタンの地図を越えるものは、清代を通じてついに現われなかった。現存している『大清一統志』の吉林と黒龍江関連の山と河川の項目をみると、黒龍江将軍が『大清一統志』を編纂するために、康熙四十九年にランタンの地図などを参考にして作った資料とほとんど重複しており、内容的にも大きな変更はみられない。

① 吉田『ロシアと中国の東部国境をめぐる諸問題』第六章を参照。なおランタン作成の地図以外の地図に関しては、Fuchs, W., Über einige Landkarten mit Mandjurischer Beschriftung,（『満洲学報』第二号、一九三三年）、船越昭生「康熙時代のシベリア地図」（『東方学報』（京都）第三三冊、一九六三年）、Sebes, *The Jesuits and the Sino-Russian Treaty of Nerchinsk (1689)*, 附図などを参照。

② 吉田氏は、清朝にはランタンの地図よりも早く、そのもとになった地図が存在しており、ネルチンスク講和会議のときにもその地図が使われたと推測された。だが康熙二十九年の国境調査の事実が明らかになったいま、もはやこの説は成り立たない。『ロシアと中国の東部国境をめぐる諸問題』五六、五七頁を参照。

③ 『黒龍江将軍衙門檔案』第二九四冊、康熙四十九年九月一日、九月二十二日、十月二十一日、および『寧古塔副都統衙門檔案』第二二冊、雍正七年七月二十二日の条。

④ 『龍沙紀略』経制、および拙稿「十八世紀アムール川下流地方のホジホン」第三章を参照。

（京都大学総合人間学部助教授）

The Investigation into the Left Bank Region of the Amur River made by the Ch'ing Dynasty Directly after the Treaty of Nerchinsk

by

MATSUURA Shigeru

In 1690 the government of the Ch'ing 清 dynasty dispatched a large scale investigating commission to the left bank of the Amur river. Their purpose was to survey the border with Russia that was defined in the Treaty of Nerchinsk the previous year, and to place stone monuments along the border.

The commission consisted of nine parties of more than fifty men each. The members were mainly soldiers of the Manchu eight bannermen 満洲八旗, Solons, and Dagūrs. Several Russians were added to each group as guides. Since the Ch'ing government considered a chain of watersheds that were the origins of the left bank tributaries of the Amur river as the border, the parties went to the top of the watersheds. They also constructed stone monuments at the mouth of the Argun and Golbitsa rivers and Mt. Uyeken (at the source of the Tugur river).

The results of this survey were of great political and scientific importance. Today nothing remains of this survey except Langtan's map, but the commission's opinion concerning the border was the official view of the Ch'ing dynasty for a long period.